



日本特別ニーズ教育学会 2018 年度中間集会

開催報告

去る 2018 年 6 月 3 日、大阪体育大学同窓会館アネックス（大阪市北区天満）にて、日本特別ニーズ教育学会 2018 年度中間集会を開催いたしました。

午前中に理事会、正午からは本学会初めての試みとなった理事会企画「若手チャレンジ研究会」、その後、実行委員会企画シンポジウムと、ギュッと詰まった一日に、約 60 名の参加があり、途中で椅子を倉庫から出すほどの盛会のもとに終了することができました。



本集会では非学会員や学部生・院生等の若い方々の参加が半数以上を占め、各プログラムでは多くの手が挙がり、積極的かつ果敢に討議に参加して下さったことが特徴的です。

〔理事会企画：若手チャレンジ研究会〕

本プログラムは、初の若手企画として理事会承認され、田中謙理事を中心に企画されました。若手会員等による研究発表（卒業論文・修士論文・博士論文等の研究デザイン発表、卒業論文・修士論文の発表、『SNE ジャーナル』投稿や本大会研究発表を計画中の研究の発表等）を行い、それぞれの研究を更に深めていく・進めていくために有効な議論の場にしていきたいという想いのもとに企画されたものです。特別ニーズ教育学に関心を寄せる研究歴がまだ浅い方々のチャレンジ



を応援するため、特別に非会員の方の参加も歓迎するなど、理事会としての想いをカタチ

にしました。



学部生・院生（修士・博士）など所属や研究歴も様々な10件の研究発表があり、5件ずつ2部会に分かれて行われました。研究発表Ⅰは、コーディネーターを田中謙理事（山梨県立大学）、コメンテーターを堤英俊会員（都留文科大学）に、研究発表Ⅱはコーディネーターを村山拓理事（東京学芸大学）、コメンテーターを野口武悟会員（専修大学）をお願いいたし

ました。各発表の内容は学会ウェブサイトにてご覧ください。

発表者からは「研究を始めたばかりで戸惑うことも多いが、今回の発表を通してとても丁寧にコメントをいただき、今後の研究への見通しが持てた」「また参加したい」「秋の研究大会にはこのような機会がありますか」との声も多く寄せられ、多様な発表内容から特別ニーズ教育学の拡がりを感じられたとともに、特別ニーズ教育学に関心を寄せる方々が本学会に集まり、研究的協同を進めていけるような学会のあり方を検討していく必要性を感じた方々も多かったようです。今後の研究大会等においても取り組みを継続できるよう、理事会で検討を重ねています。



〔実行委員会企画：シンポジウム〕

子どもの発達支援ニーズをどのように受け止め、支えていくのか —支援が届きにくい子ども・保護者と特別ニーズ教育の課題—

司 会 学会副代表理事・東京学芸大学教授 加瀬進氏
話題提供 大阪市立南港桜小学校校長 市場達朗氏
(ドキュメンタリー映画「みんなの学校」の舞台：大阪市立大空小学校前校長)
岸和田市立山直北小学校教諭 田中元氏
ピア・サポートセンター代表 森定薫氏
指定討論 大阪教育大学教育心理科学講座教授 新崎国広氏

本シンポジウムは、11月17・18日に開催される第24回研究大会（大阪体育大学）のプレ企画として企画されました。

現代の急激な社会構造の変化、家庭の経済的格差や養育困難の拡大のなかで、不安・緊張・恐怖・ストレス等が複雑に絡み合い、自律神経失調症・心身症、抑うつ・自殺、不登校・ひきこもり・中





途退学などの心身の発達困難、いじめ・暴力・被虐待、触法・非行などの多様な不適応を有する子どもへの支援が喫緊の課題となっています。そして、これらの課題は決して特殊ではなく、子ども全体の問題としてとらえることや「子どもの育ちと発達の貧困」の解消が第一義的な課題となっています。

子どもたちの置かれている状況は様々ですが、子ども・若者が多層的な発達困難に追い込まれていく現状のなかで、とくに障害の診断はないものの支援が必要な子ども、家庭の養育環境が不安定な子ども、児童養護施設等入所の子ども、非行・触法等の課題がある子ども、外国にルーツのある子ども、保護者が疾病・障害等を有している子どもなど、通常学級を中心とした「支援が届きにくい子どもや保護者」から、その「子どもの発達支援ニーズをどのように受け止め、支えていくのか」を、学校教育と他領域の協働の視点から議論しようと企画されたものです。

話題提供いただいた市場達朗氏からは、ドキュメンタリー映画「みんなの学校」の舞台となった大阪市立大空小学校における実践から、自閉症のきょうだいと他の児童や教師たちのかかわりを通して、障害児本人の「願い」や「発達」についてお話しいただきました。



田中元氏からは、かつて「課題集中校」とも称された小学校において、特別な教育的ニーズを有する子どもへの早期介入とチーム支援システムを構築してきた実践を通して、発達障害・愛着障害・被虐待・養育困難等の子どもと家族への支援の模索をお話しいただきました。

支援の困難事例へのピア・サポートを行っている森定薫氏からは、学校のなかではうまく振舞っていたり、特に問題のなく一生懸命に見える児童生徒が、卒後にトラウマ等により躓いているケースの多さに注目し、当事者の立場から学校から社会への移行期を中心にお話しいただきました。

いずれの話題提供においても、日頃の教育実践や家庭・保護者・地域とのかかわりについて、



子どもや保護者のリアルな声・姿をもとにご報告いただき、それらを通して、本学会の大切にしてきた理念を確認し、深める機会となりました。

さらに、指定討論の新崎国広氏からは、肢体不自由児者施設で21年間ソーシャルワーカーとして奮闘されてきたご経験も交えながら、日々の教育実践や子どもの姿、学校における支援体制を改めて捉えなおす視点をご指摘いただき、加瀬進副代表理事の司会進行と合わせて、その後のフロアとのやり取り

が活性化しました。

フロアからは、子どもたちや家族、教師・支援者らが迷い、悩み、戸惑い、躓きながら奮闘する姿を通して、「息の長い支援」「懲りずに続けていく支援」「いつでも安心して相談できる相手」であり続けるための、方法やシステム等に関する意見や問いが多く投げかけられました。終了後、ご登壇いただいた皆様からも相互に学ぶことの多い議論だったことや、若い参加者の活発な姿に今後への期待が寄せられています。

高橋智代表理事からは、本シンポジウムの議論を通して、子どもに向き合い、逃げず、言葉にならない子どもの声を通訳していくことが、学校から子どもを排除せず、子どもの安心を保障していくことを改めて感じ、本学会で引き続き深めていく論点を見出すことができたコメントいただきました。

今回の議論の続きは、第24回研究大会の1日目(11月17日)の実行委員会企画シンポジウムⅠ及びⅡにて行う予定です。特別支援教育が制度化される前から本学会で議論を重ねてきた特別ニーズ教育学の理念・対象・方法・研究について多様な立場と視点から考え続ける企画となるよう準備しております。皆様のご参加をお待ちしております。

- * 11月17・18日に大阪体育大学(熊取学舎)で開催する第24回研究大会にて行います。
- * 11月16日には前日企画として、「特別ニーズ教育学を現場から考える」ためのスペシャルプログラムを用意しています。詳細は後日、学会ウェブサイトに掲載します。
- * 大阪府内は昨今の外国人観光客の急増により、宿泊地の確保が大変難しくなっています。早めの確保をお願いいたします。会場へのアクセスを考えると、りんくうタウン駅・関西空港駅・日根野駅・天王寺駅辺りがおすすめです。

日本特別ニーズ教育学会 2018 年度中間集会 実行委員会
日本特別ニーズ教育学会第24回研究大会(大阪大会) 実行委員会

実行委員長 後上 鐵夫 (大阪体育大学 教育学部)
副実行委員長 松崎 保弘 (大阪体育大学 教育学部)
実行委員 曾根 裕二 (大阪体育大学 教育学部)
実行委員 田部 絢子 (立命館大学産業社会学部)

文責：田部絢子